

## 19 外から飛び込んだ福祉の世界。 やりがいと誇りをもって

こすぎやま たかし  
小杉山 敬 (社会福祉法人たんぼぼ会理事長)



働くことの意味を考え直して、福祉の世界へ…◆

若いころ、テレビや雑誌、イベント、タレントなどクリエイティブで華やかな世界にあらがれて、最初に選択した職業は広告代理店でした。華やかな業界のなかで、営業という物事の価値が数字やお金でしかなく、働くとはお金を稼ぐこと、仕事はお金を、数字を取ってくるということの世界でした。

数字を取ってくるために、あの手この手でお客様の要望に応え、仕事は深夜までつづくことも多かったです。すこし仕事に慣れてきたとき、一緒に仕事をしていたデザイナーに「営業は相手の才能で食っている。

自分たちはなに生み出さない」と言われたことがありました。仕事、数字を取ってくるというのはそうかんなんなことではなく、たいへんな努力とアイデアや才能が必要だと思ってやってきていたので、衝撃でした。

そのこともあり、仕事とはなにか？ と考えはじめました。その時の仕事はだれかから感謝されることや、だれかの役に立っている実感もなく、「もっと自分にしかできないことがあるのではないか？」「このまま子どもの寝顔しか見られないような生活をつづけしていくのか？」「自分にはなにが向いているのか？」「なにができるのか？」と考えるようになりました。

積み重ねてきたスキルを福祉の仕事に活かして…◆

だれかの役に立つ仕事、人のためになる仕事をしてみたいと思うようになったのは、母親が病院の事務をしていて、ケガをしたときによくその病院にお世話になっていったこと、祖父が教員だったことなども影響しているかもしれません。調べるうちに、福祉の仕事は働きながら資格が取れ、自分がやってきた「課題を聴き、調整する。お金ではないだれかのためになれる仕事で、今までの自分のスキルを活かせるのではないか」と思うようになりました。

ケアマネジャーという仕事があることを知り、それを目指し、ヘルパー2級の資格を取り、福祉の世界に飛び込みました。三年で無事、介護福祉士を取得。その後五年目に介護支援専門員の資格を取得し、念願のケアマネジャーの仕事に就けるようになり、縁あって、今の法人の相談員兼施設ケアマネジャーとして働くことになりました。

つながり、支え合い、共に育てていく…◆

社会福祉法人である今の法人で働いていて、本当に困っている人がいることを知りました。家の壁がなく

て玄関はビニールシートの家に住んでいたり、家族や身寄りがいない人、身内から縁を切られている人、母親が認知症になっていることが理解できない息子、生活破綻、介護放棄、虐待…：自分が今まで知らなかった、かわろることがなかった人たちが、そしてすぐにもだれかが手を差し伸べる必要がある人たちが、現実存在していることを知りました。

同時に、その人たちのために一生懸命、誇りをもってがんばっている人たちと出会うことができ、「自分もあんなふうになりたい」「自分の仕事に誇りを持って、困っている人に寄り添っていきたい」と思いました。なかでも21世紀・老人福祉の向上をめざす施設連絡会(21・老福連)の人たちとの出会いはとても大きく、常に自分の目標で、元氣と勇氣をもらっています。

法人や後援会の人たち、つながりのあるほかの法人、21・老福連の人たち、全国会議の仲間、同じ福祉の仕事に想いをもって働いている人たちと出会い、そして育ててもらっているといま感じています。理事長となり、法人で働く職員が、福祉の仕事をしていることに誇りが持てるようになってほしいと思っています。そして、この職業を選択した自分が正しかったと心から思える手助けができればと思っています。